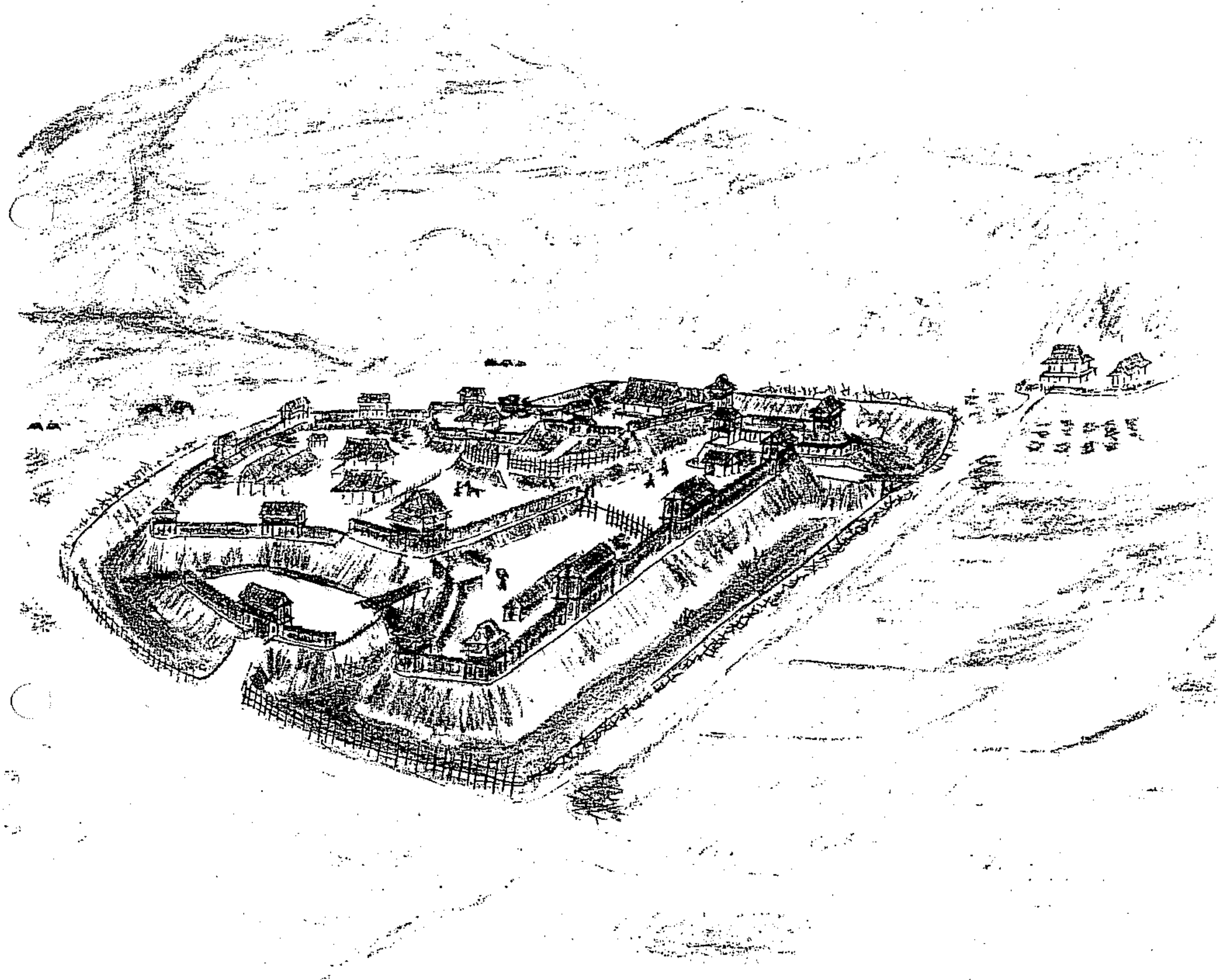


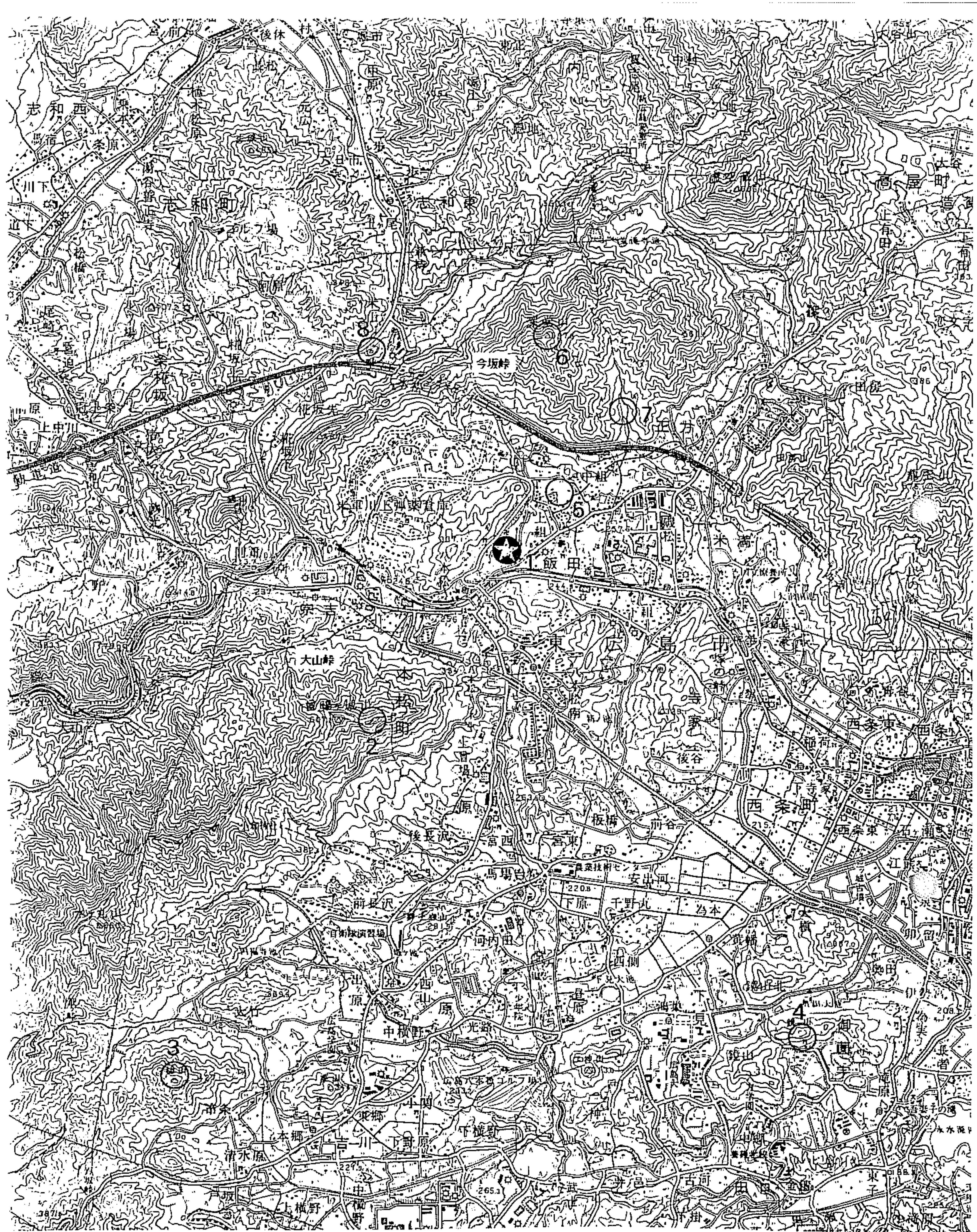
1999年6月27日(日)

東広島市八本松町大字飯田所在

土居遺跡発掘調査遺跡見学会資料



財団法人東広島市教育文化振興事業団
東広島市教育委員会



- | | | | | |
|--------|--------|--------|--------|-----------|
| 1 土居遺跡 | 2 杣城跡 | 3 植山城跡 | 4 鏡山城跡 | 5 城仏土居屋敷跡 |
| 6 清滝城跡 | 7 清滝寺跡 | 8 米山城跡 | | |

遺跡分布図(1 : 50,000)

I はじめに

土居遺跡は、東広島市八本松町大字飯田に所在する中世の平城跡です。城跡は、北西に位置する丘陵の裾部分、緩やかに南東に下がっていく地形のところに築かれています。

周辺には杣城跡、清滝城跡、城仏土居屋敷跡、清滝寺跡などの中世の遺跡が多く分布しており、西条盆地の西の端として重要な位置にあったことが知られます。

この城跡は、以前から『川上村史』などにも記載があり、「土居」、「堀」、「下堀」、「西堀」などの地名から城館跡の存在したことが知られていました。

このたび、保育所移転用地造成のために、平成11年5月から約2ヶ月間、発掘調査を実施しました。調査面積は500 m²と遺跡全体から見ればわずかですが、城の一方のかなめである北側の出入口部分が見つかり、大きな成果を挙げることができました。

II 調査の概要

土居遺跡は、以前から南から東にかけて堀の痕跡があることが地名や空中写真によって知られていました。今回調査した部分については不明でしたが、試掘調査によって幅の広い堀らしき溝が確認され、城の一部であることが明らかになりました。

発掘調査は、堀部分から始められ、次いで城内部分の調査を行いました。

調査の結果、堀跡、土橋、通路状平坦面、土塁跡、井戸、水溜状遺構、柱穴群などが見つかり、土師質土器皿、土鍋、播鉢、白磁皿や漆器椀、折敷と呼ばれるお盆、はしなどの食器類、鍬などの農具のほか、中世のものとしては初めて鉄のタガがはめてある完全な形をした柄杓などが出土しています。

また、遺構の状況、周囲の状況などから通路状平坦面が、実は中世のものとしては非常に大型の櫓形虎口であることが判明しました。

III 遺構と遺物

遺構(図1、図2)

堀 調査区の北側で見つかりました。現状で幅約10.7m、深さは約3mあり、底が平らな箱堀と呼ばれる形です。底には泥と砂が堆積しており、堀が機能していた時には泥沼のような状態だったと思われます。

また、底から20~30cm ぐらいの高さのところに遺物が投げ込まれた状態でたくさん出土しました。それより下の層や上の層からはほとんど遺物が出土しなかったことから考えると、城が機能していた当時、堀が埋まってしまわないように定期的に泥を上げていたものが、城としての機能を失った時点で泥を上げる必要がなくなり、たまたまその頃捨てられた土器などのゴミがそのまま残ったと推測されます。

土橋 堀の西端で確認されたもので、堀底からの高さは約2mで、長さは約7mあります。土橋の北端は小さな水路で分断されていて土橋の西側から流れてくる水を東の方向に流すようになっています。土橋の南側の付け根には江戸時代の終わりから明治にかけての井戸が掘られていました。

土塁跡 堀の南側にL字形の何も遺構の無い地帯があり、東側では若干の段差を持っていま

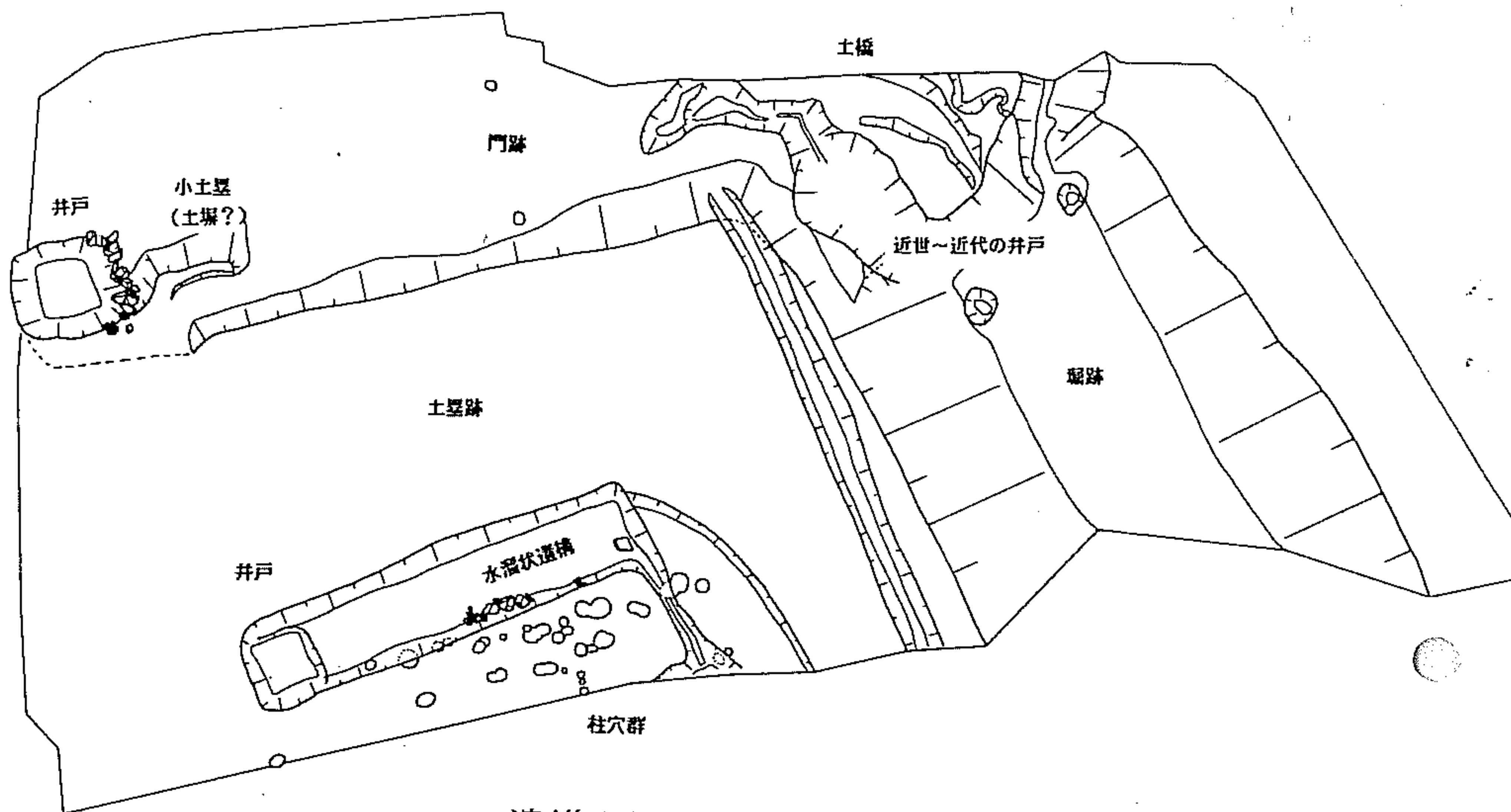


図1 遺構配置図(1:200)

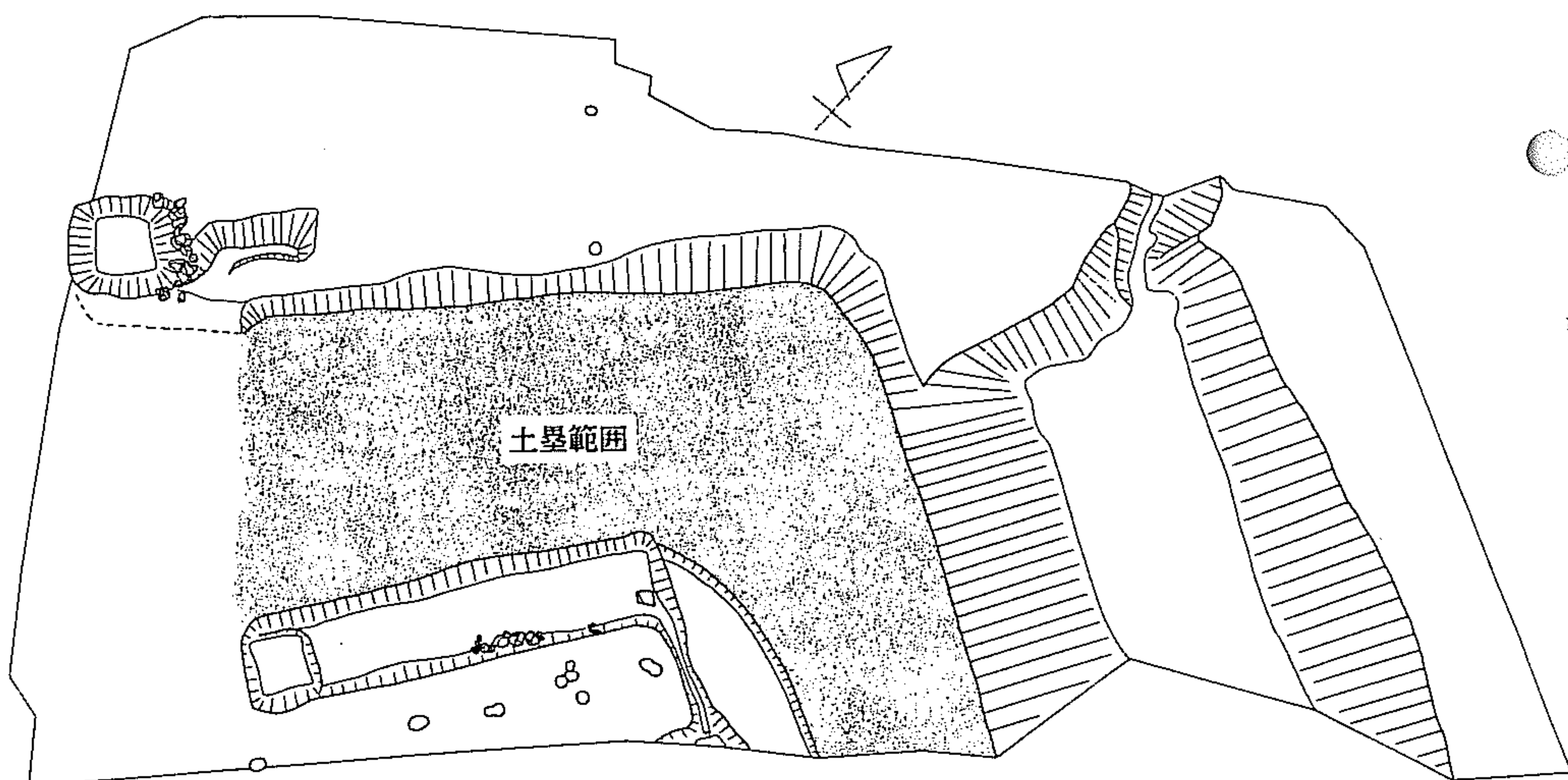


図2 城郭に伴う遺構配置図(1:200)

す。これは土塁の削られた跡と考えられます。土塁の内側に当たる部分には柱穴がたくさんあることも土塁跡の何も無いところと対照的です。

土塁跡の幅は7m～5m あり、そのことから土塁の高さは2m 以上あったと思われます。

水溜状遺構 土塁に接して掘られています。幅は約2.4m、深さは約60cm あり、東側から水路で導入し、水を溜めていたようです。南端は約1.5m の深さの井戸になっています。水溜状遺構の中ほどには、石がいくつか並べてあり、中に降りられるようになっていたようです。

小土塁 土塁跡の西側にある小さな土塁です。形状から土塀の基礎と考えられ、枡形空間から城内に入る際に一度に大勢が入って来られないように土塁との間を幅約1m ほどに狭める役割を持っていたと考えられます。

井戸 小土塁の南、本丸部分の斜面に接して位置する井戸です。平面形態は四角形で、深さは約1.8m あります。素掘りですが、周囲だけ石が並べてありました。中から白磁皿、漆碗、柄杓が出土しています。小土塁と合わせて敵が簡単に城内に入ることができないよう、堀としての機能も持っていたようです。

遺物(図3)

城に伴う遺物としては土器、陶磁器、木製品、古銭などがあります。

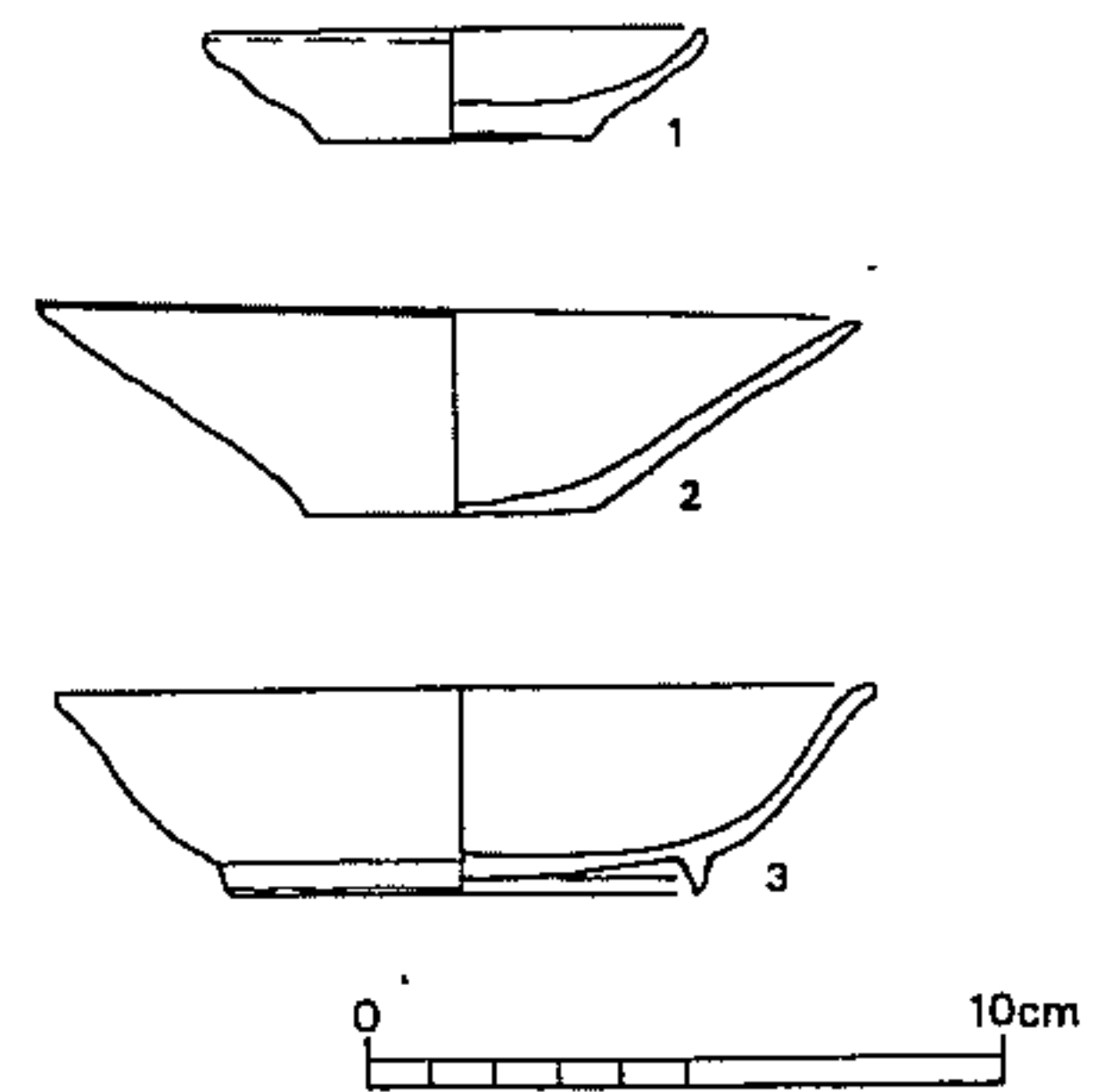
土器は、ほとんどが土鍋で、吊り下げるための耳が付くものと付かないものの2種類があります。大部分が堀からの出土で、底が抜けたものや割れたものを投げ捨てたようです。ほかには土師質や瓦質の播鉢が比較的多く出土しており、土師質土器皿も少量出土しています。

陶磁器には備前焼や中国陶磁があります。備前焼は甕、播鉢が出土しています。15世紀後半から16世紀前半にかけてのものです。中国陶磁には白磁と青磁があります。白磁は16世紀前半代の遺跡からよく出土する端反の皿です。青磁は小さな破片が3個ありますが器形のわかるものは碗で、細線連弁文と呼ばれる模様が付いており、16世紀前半の遺跡からよく出土するものです。

木製品は漆器碗、折敷、箸状木製品、鋤、柄杓、竹ザルなどがあり、「大般若経家門」と書かれた木簡も出土しています。

柄杓は、直径約18cmで桶構造をしており、タガは鉄製です。鉄のタガがはめられた桶は、中世のものが現在まで確認されておらず、土居遺跡で初めて確認されました。

これらの遺物の時期は、土師質土器の形態から16世紀中頃と考えられます。



1、2 土師質土器皿 3 白磁皿

図3 出土遺物実測図(1:3)

IV 土居遺跡の構造

土居遺跡は、広島県では珍しい平地に位置する城跡です。平地の城は、平らな所にあることから山城や丘城に対して平城と呼ばれます。調査した範囲は、城の北側の一部で出入口に当たります(図 4)。この場所は、東南から延びてきた土塁が南西に向けて直角に折れ曲がり、その西側は一段低くなっています。ここは土橋からまっすぐ入ってきた場所に当たり、突き当たりは本丸部分になります。つまり、土塁跡と本丸に囲まれているという構造になります。堀は、土橋の向こうくらいから本丸の背後に向けてカーブし始めると考えられ、また、その堀は土塁を伴うと考えられるので、この土橋の内側は、模式図(図 5)のように 3 方を土塁と本丸で囲まれることになります。このような構造を櫓形虎口と呼びます。

櫓形とは櫓のように四角い形をしているという意味ですが、土居遺跡の場合、土橋を渡ってすぐの所に 2 つの柱穴があり、門跡の一部と考えられます。門の大きさは幅が約 3.5m あり、大きな門です。門の内側は奥行約 11m、幅 8m 以上の広い空間となっており、かなりの人数が入ることができます。しかし、櫓形からさらに城内に入るためには、土塁と小土塁の間を通らなければなりません、ここは幅約 1m で人一人通るのがやっとです。

つまり、仮にこの城が攻められたとして、攻め手は、土橋を渡って最初の門に殺到します。城側も黙ってみてはいませんから、最初の門を破るのも容易ではないでしょう。それでもどうにかして門を破って櫓形空間に侵入しても本丸や周囲の土塁の上から城側の反撃を受けてしまいます。さらに中に入るためには小土塁のところを一人ずつ通らなければなりません、その先にも門があり、それを破る作業は先頭の一人がしなければなりません。しかも、周囲からの攻撃はますます激しくなるのです。仮にそこを破ったとしても、その先は本丸の南端が東側に向けて飛び出し、喰違い虎口となっていて真っ直ぐ城内に入ることはできません。このように何重にも防御の工夫がなされており、容易に城内への侵入を許さない構造になっていました。

一方、城兵が出撃するときは、一旦小土塁の所を抜けて櫓形に集結します。そして内側の城門を閉めて外側の城門を開いて出撃するのです。城が最も危険な状態になるのは城門の開け閉めのときですが、このようにすれば敵が付け入ってきても櫓形の中で処理できるのです。

このような櫓形といわれる防御施設は、これまで 16 世紀の後半になって造られるようになり、織田信長や豊臣秀吉といった人たちの時代に次第に完成に近づいていったとされてきました。この土居遺跡で完成された櫓形虎口が見つかったことは、16 世紀の半ばには既にこのような城を造る技術水準が出来上がっていたことを示します。

次に城全体の構造ですが、発掘調査を実施していないので、『川上村史』に記載のある

本丸部分の正面以外の 3 方に土塁がめぐっている

「下堀」、「堀」、「西堀」の地名がある

「土居」、「堀切」の屋号を持つ家があった

という情報と空中写真から窺われる堀の推定線ぐらいしかわかっていませんでした。

遺跡範囲の中での特徴は「堀」と呼ばれる一段低い荒れ地に囲まれた畠の部分ですが、ここは四方を堀で囲まれ独立した区画になっていると考えられていました(図 6)。

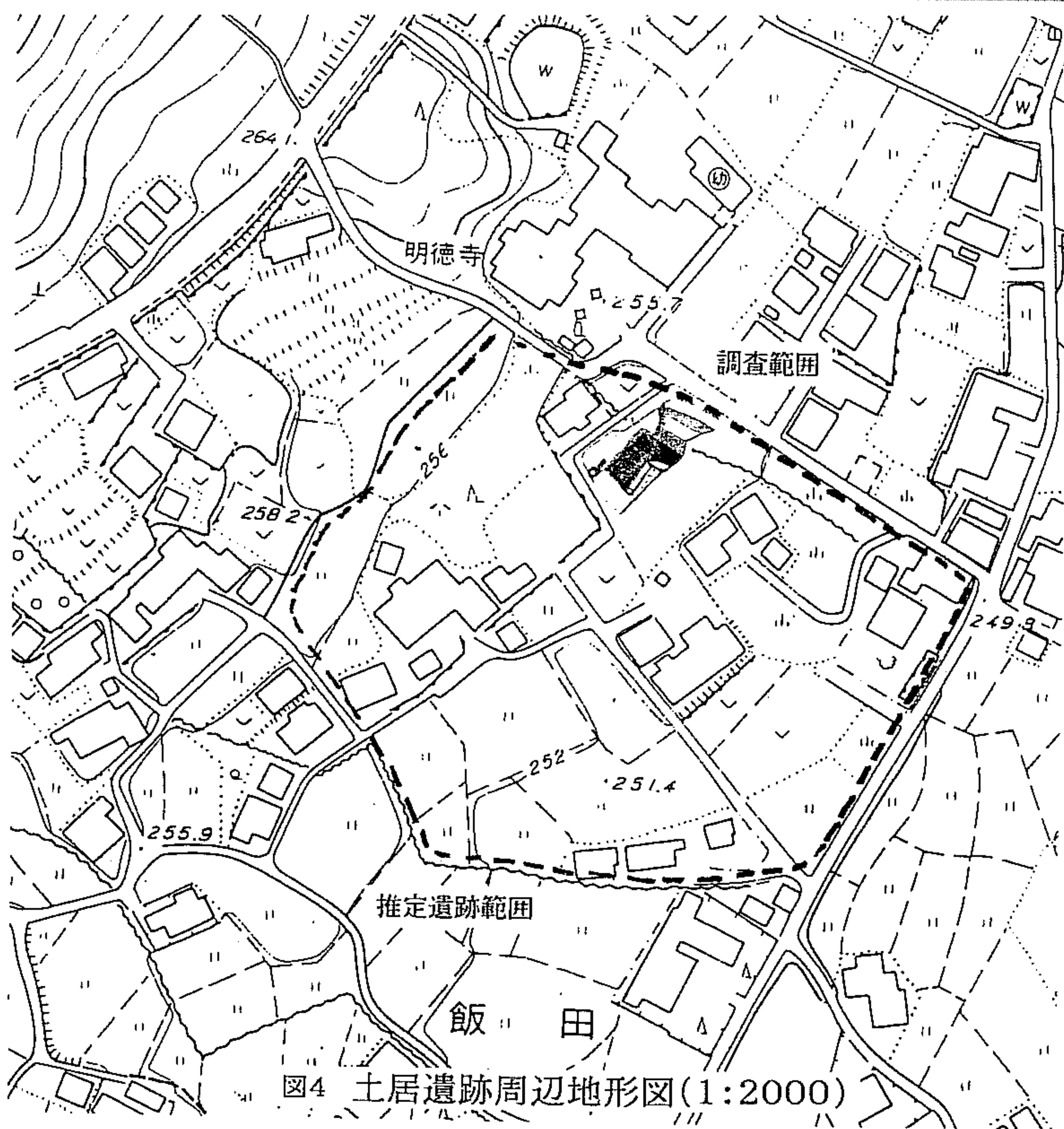
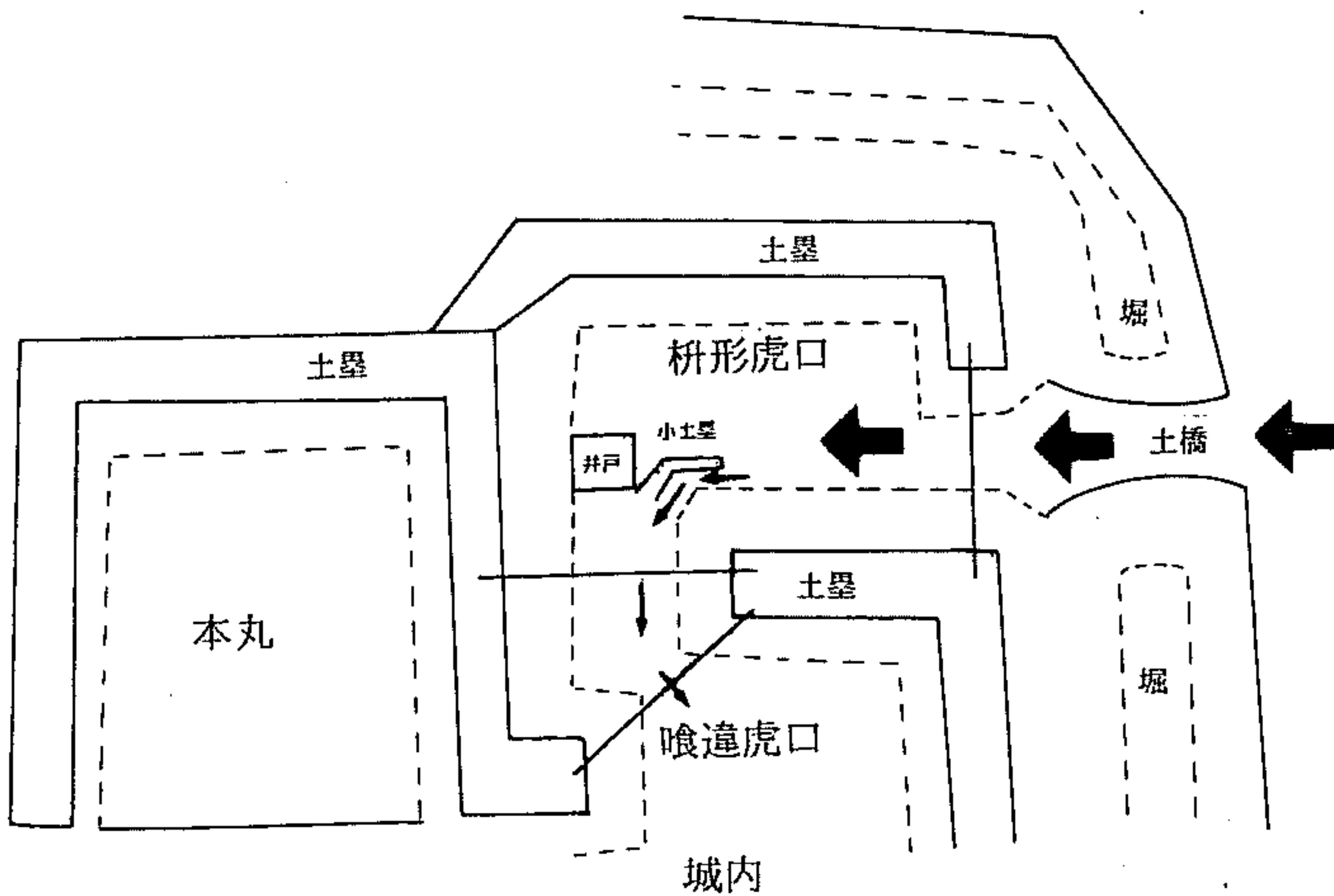


図4 土居遺跡周辺地形図(1:2000)



← 城攻めの際のルート

図5 土居遺跡虎口模式図

性格については不明でしたが、今回の発掘調査で、城の裏口に当たる搦め手部分で極めて発達した櫓形虎口が発見されたことから、城の正面に当たるこの区画が、もう一つの発達した虎口である馬出(うまだし)と呼ばれる虎口である可能性が非常に高くなりました。

これは、先ほどの櫓形をさらに堀で区画したような施設で防御にも攻撃にも大きな効果を発揮するとされています。

馬出は 16 世紀後期、東日本で発達したとされ、西日本では安土桃山時代にならないと使用されないといわれてきました。発掘調査を実施していないので確実ではありませんが、この区画が馬出である可能性は非常に高いといえます。

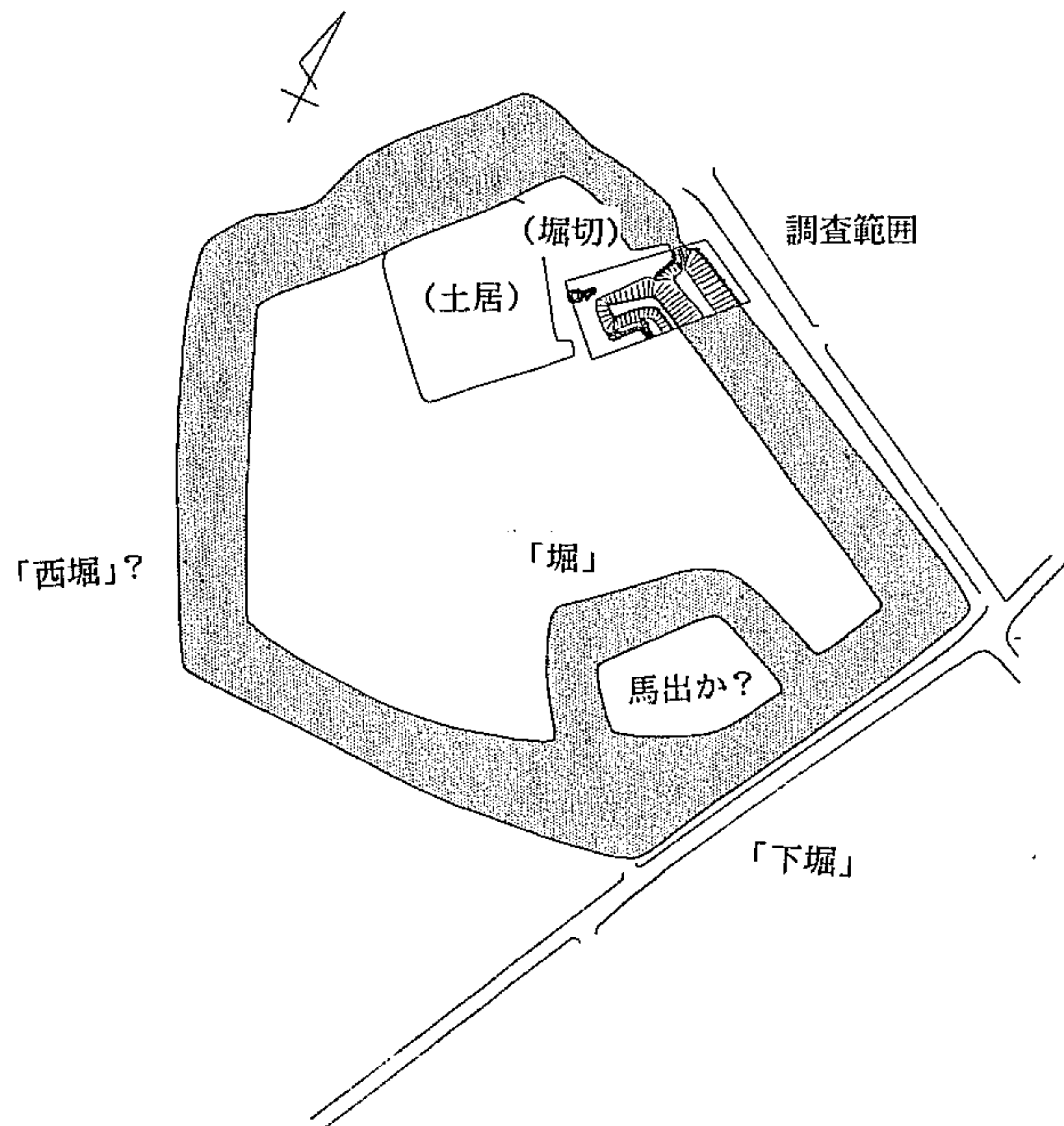


図6 堀跡想定図(1:2000)

V 土居遺跡の城主

では、このように異常に発達した城を造った人は誰なのでしょう。

この城は城名も伝わっておらず、直接城の存在を表わした古文書などありません。ですから推測に頼らざるを得ないのですが、結論から言うと大内氏の東西条郡代の可能性がもっとも高いと思われます。

1523年の鏡山城落城後、この地域の支配拠点はずいぶん近くの杣城に移ります。杣城には大内氏の重臣が東西条郡代として在城しており、郡代が山口に帰ったり出陣しているときには小郡代が政務を代行していました。1543年、東西条代官は安芸守護代に昇格します。それに伴い小郡代が郡代に昇格したと考えられます。安芸守護代弘中隆兼は支配拠点を杣城から南方の槌山城に移します。その理由ははっきりしませんが、それによって杣城のすぐ北側を通る山陽道の大山峠やや北に位置する今坂峠といった主要な街道が拠点から大きく外れることになりました。郡代にそのまま杣城を守らせてもよいのですが、杣城は巨大な城で標高も高く維持には莫大な費用がかかります。また、どこからでも見える大きな山で、しかも安芸守護代と同等の地位にあった東西条郡代が在城していた城ですので支配の象徴としての意味もあったと思います。守護所は槌山城に移っていますから杣城と並び立たせるわけにはいかなかったと思います。そこで防御は極めて固いが、シンボリックな意味のない平地にこの城が造られたのでしょう。

この当時の郡代が誰であるかははっきり書かれたものはありませんが、弘中隆兼が山口に帰っている間に城代をしている菅田宣真と考えられます。この菅田氏は飯田、特に土居遺跡周辺やそばの妙徳寺と深い関係にあったとされ墓も同寺にあります。そのほかの状況証拠もあわせ、概ね以上のようなことから、土居遺跡は大内氏が築き、郡代を在城させた城であると推測されるのです。

また、その廃城の時期ですが、毛利元就が陶・大内氏に謀叛を起こして津和野城攻めため留守にしていた安芸の大内方諸城を攻めて安芸を手中に収めた1554年頃と見るのが適当でしょう。

VI おわりに

櫓形虎口の発見や馬出の想定は土居遺跡が中世城郭として一つの完成された姿を持っていたことを示します。ただ、現在までのところ、大内氏の領国でこのような城の類例はありません。それどころか、16世紀中頃という時代はどこを見渡してもこれほど進んだ城を見出すことができないのです。

鏡山城、杣城、槌山城を始め、大内氏の築城技術が高い水準にあったことは、近年見直されつつありますが、土居遺跡の調査によって、その水準が他の守護大名、戦国大名をはるかに凌ぐものであったことが証明されたといえるでしょう。

用語解説

^{どい}
土居……土を盛り上げた土手のこと（土塁）。転じて平城や居館を指す。

^{こぐち}
虎口……城の出入口、城の弱点となるため特に嚴重に固める。

^{ますがけこぐち}
枡形虎口……城の出入口を守るため門を二重構造にし、周囲を土塁や堀で四角く囲った空間。

^{くいちがいこぐち}
喰違い虎口……直線の土塁が門のところで口を開けるのではなく、片方が内か外にきて喰い違
う虎口。敵がまっすぐ侵入するのを防ぐ。

^{うまだし}
馬出……虎口の前面に堀で囲まれた空間を造り、敵の侵入を防ぐとともに出撃口の確保を図る
施設。

^{とうさいじょうぐんたい}
東西条郡代……東西条代官ともいう。山口の守護大名大内氏の地方官で、仁保氏、安富氏、内
藤氏、陶氏、弘中氏、杉氏などの最有力家臣が任じられた。各領国の守護代と同等
の役職。後に守護代に昇格。鏡山城、後に杣城を拠点とした。

^{ひろなかたかね}
弘中隆兼……中務丞・三河守。1528年から1539年まで東西条郡代、1543年から1551年まで
安芸守護代を務めた大内氏の重臣。1543年、守護所を杣城から植山城に移す。石見
高橋氏攻め、安芸頭崎城攻め、備後神辺城攻めに活躍。安芸のみならず備後も管轄し
た。西条守護と呼ばれた。厳島合戦で討死。

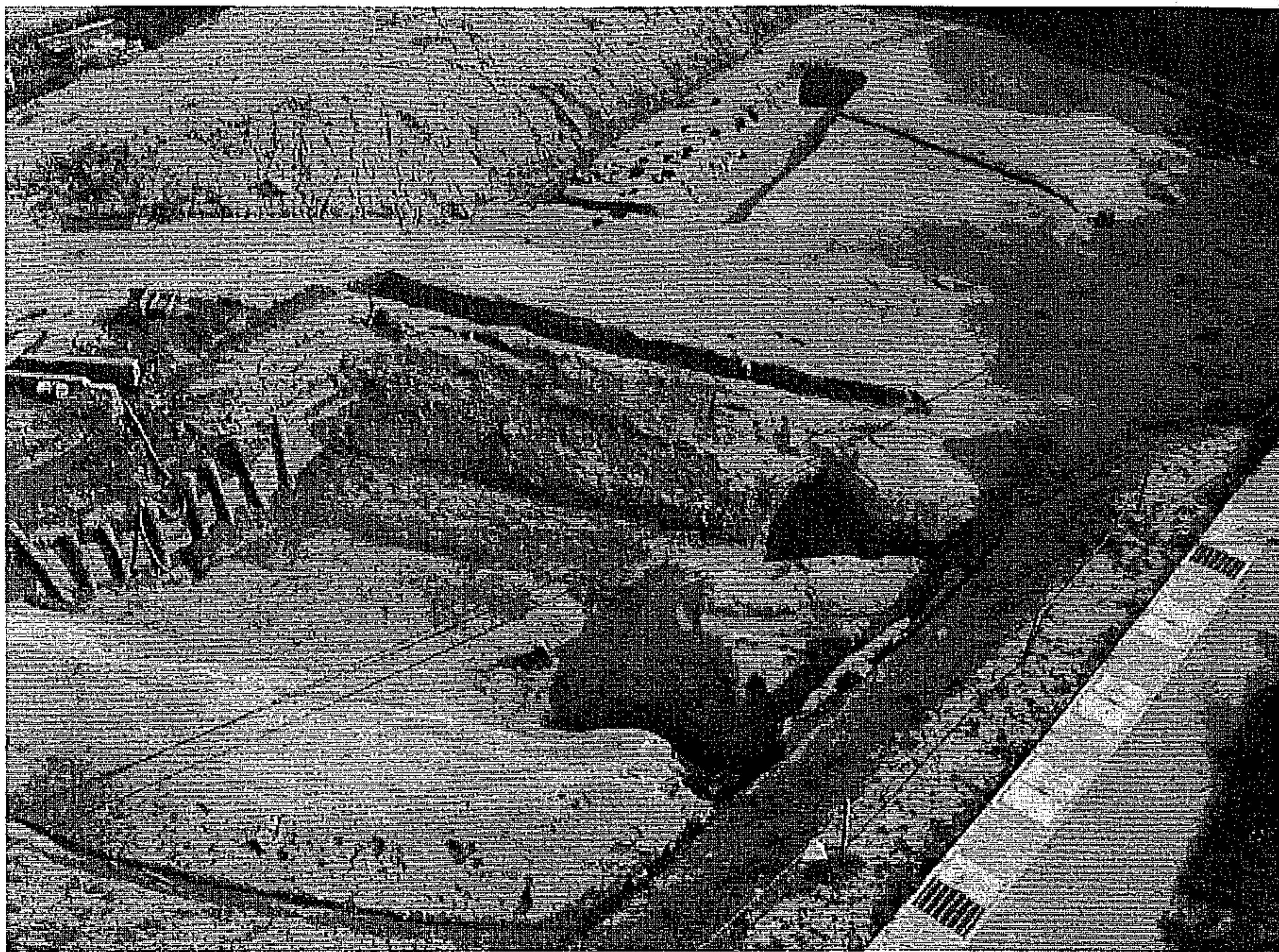
^{すげたのぶさね}
菅田宣真……黒瀬菅田村に住したことから菅田氏を名乗るとされる。飯田にも所領を持ち飯田
氏とも名乗る。宣真の宣の字は弘中隆兼の前任者杉隆宣の一字を貰ったものと思われ、
杉・弘中両氏のもとで小郡代、郡代を務めたものと思われる。大内義隆滅亡時に植山
城に籠り指導的役割を果たすが、落城。



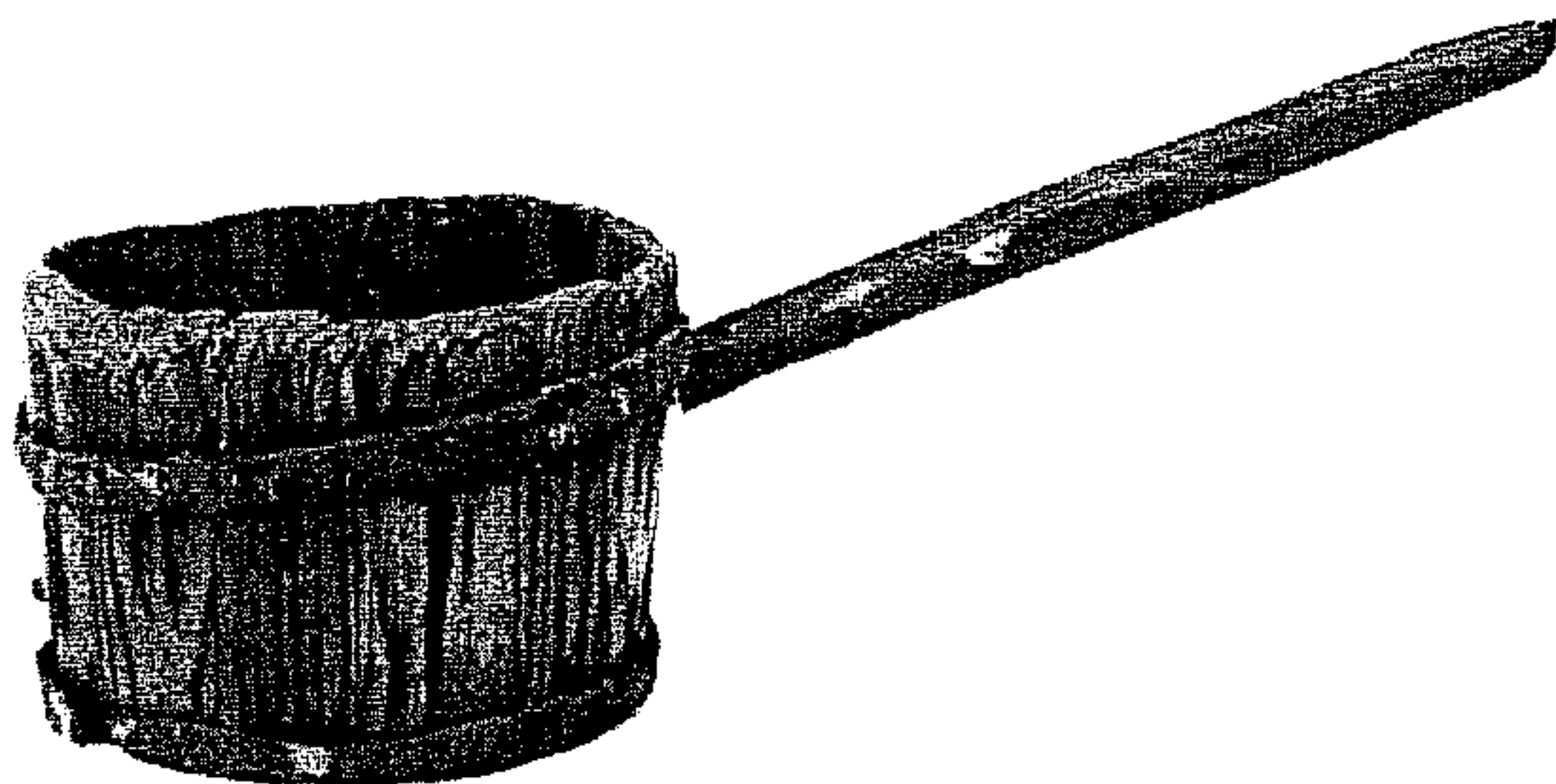
堀検出状況



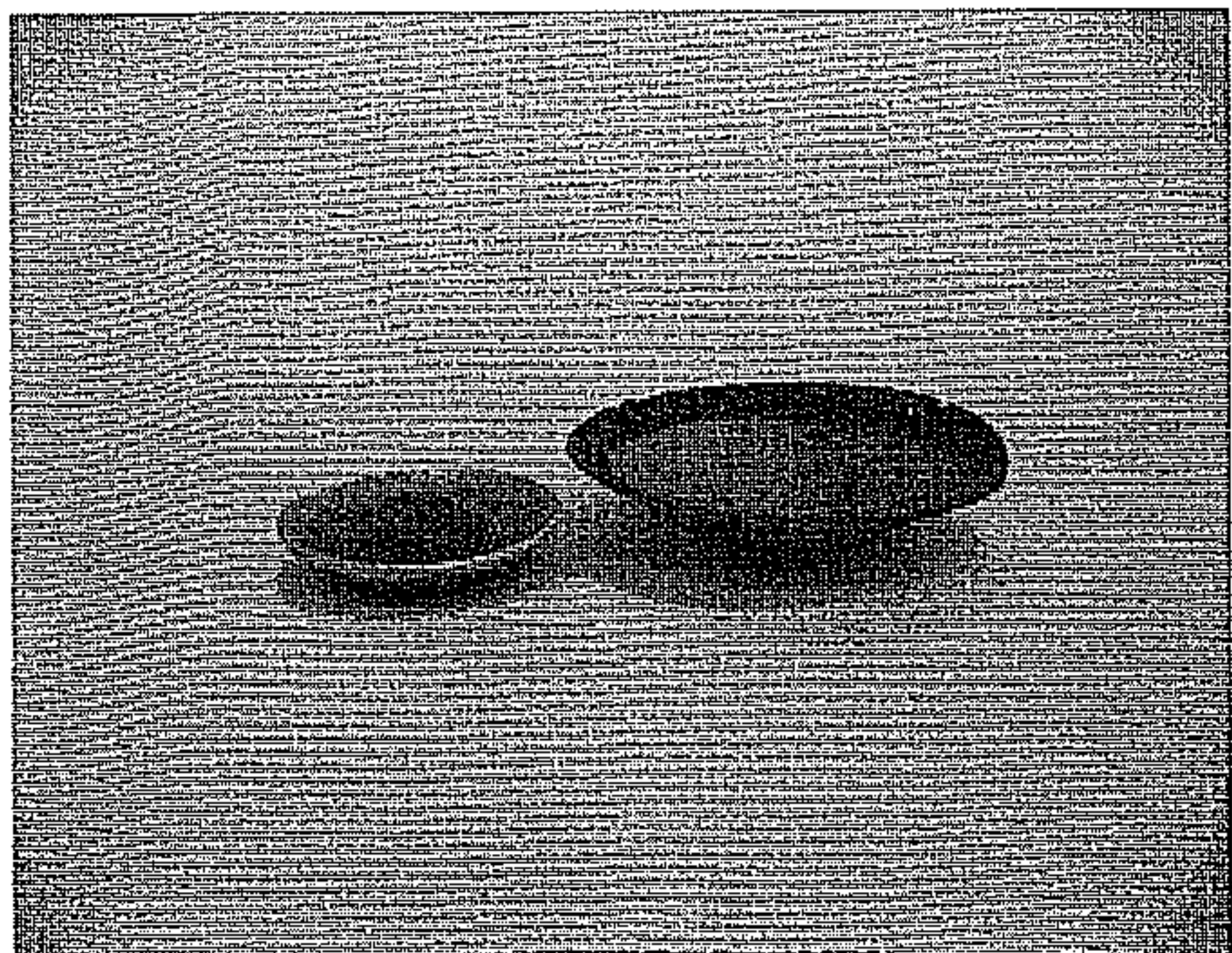
竹ザル出土状況



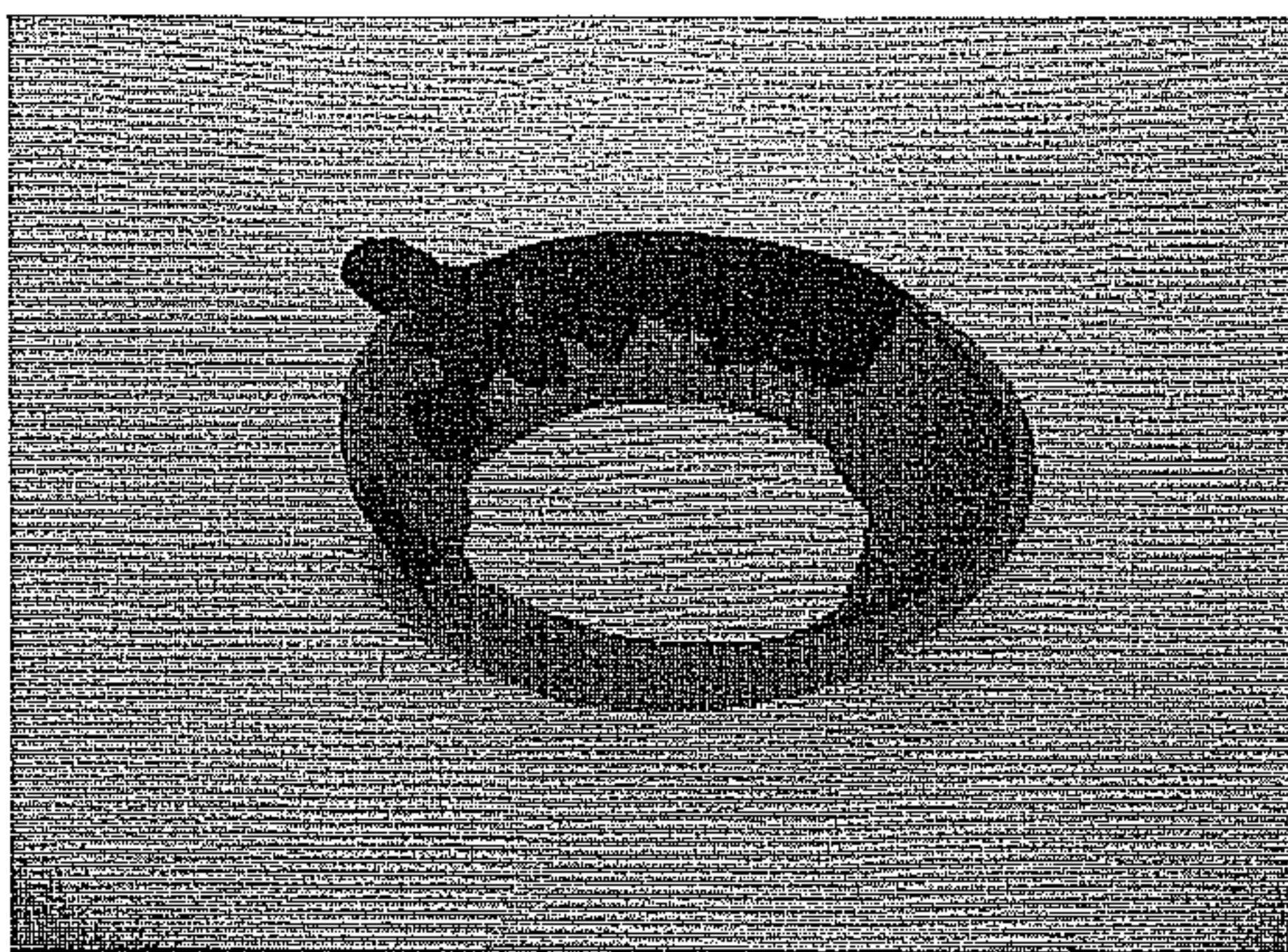
全景



柄 杓



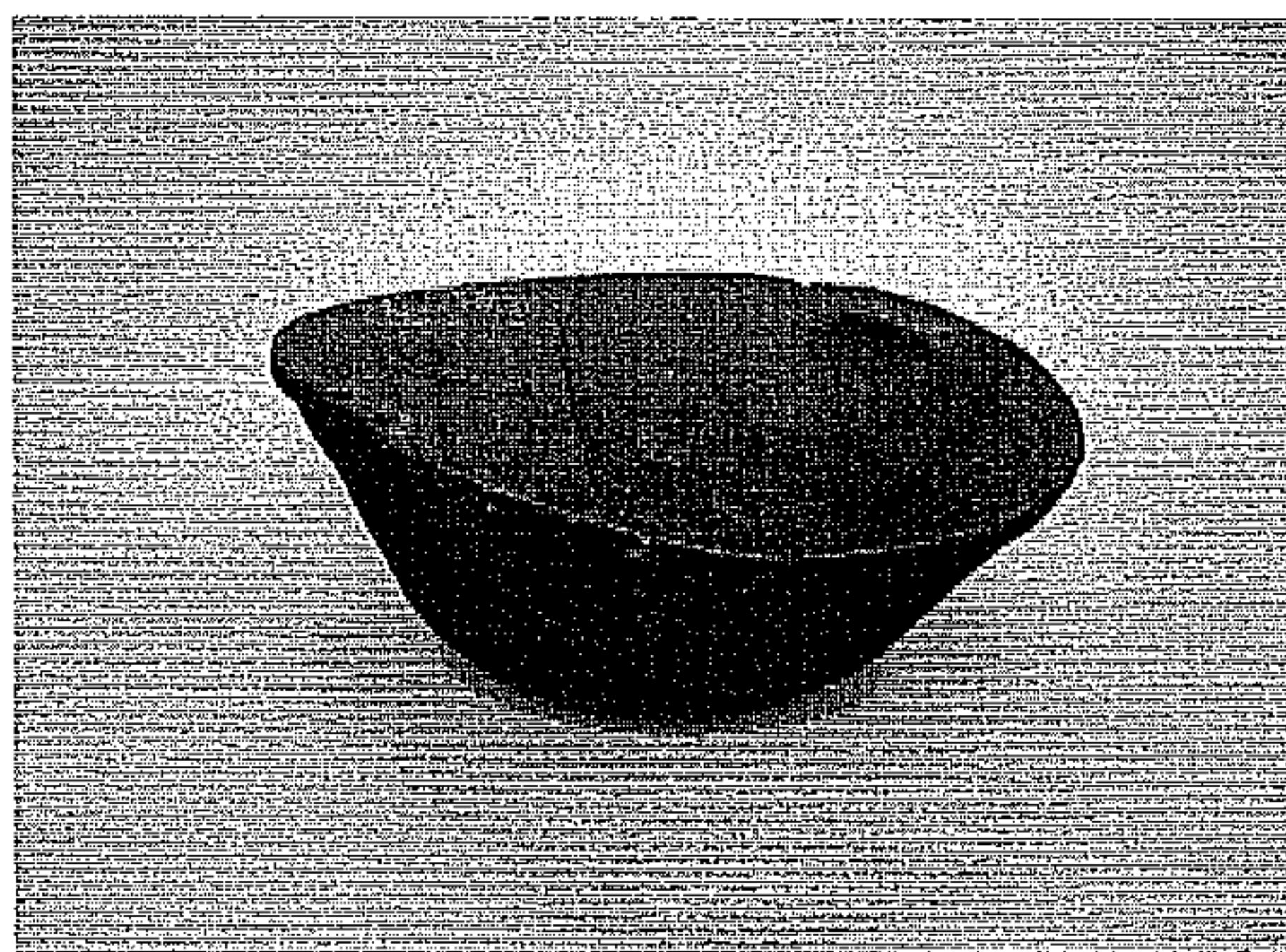
土師質土器皿



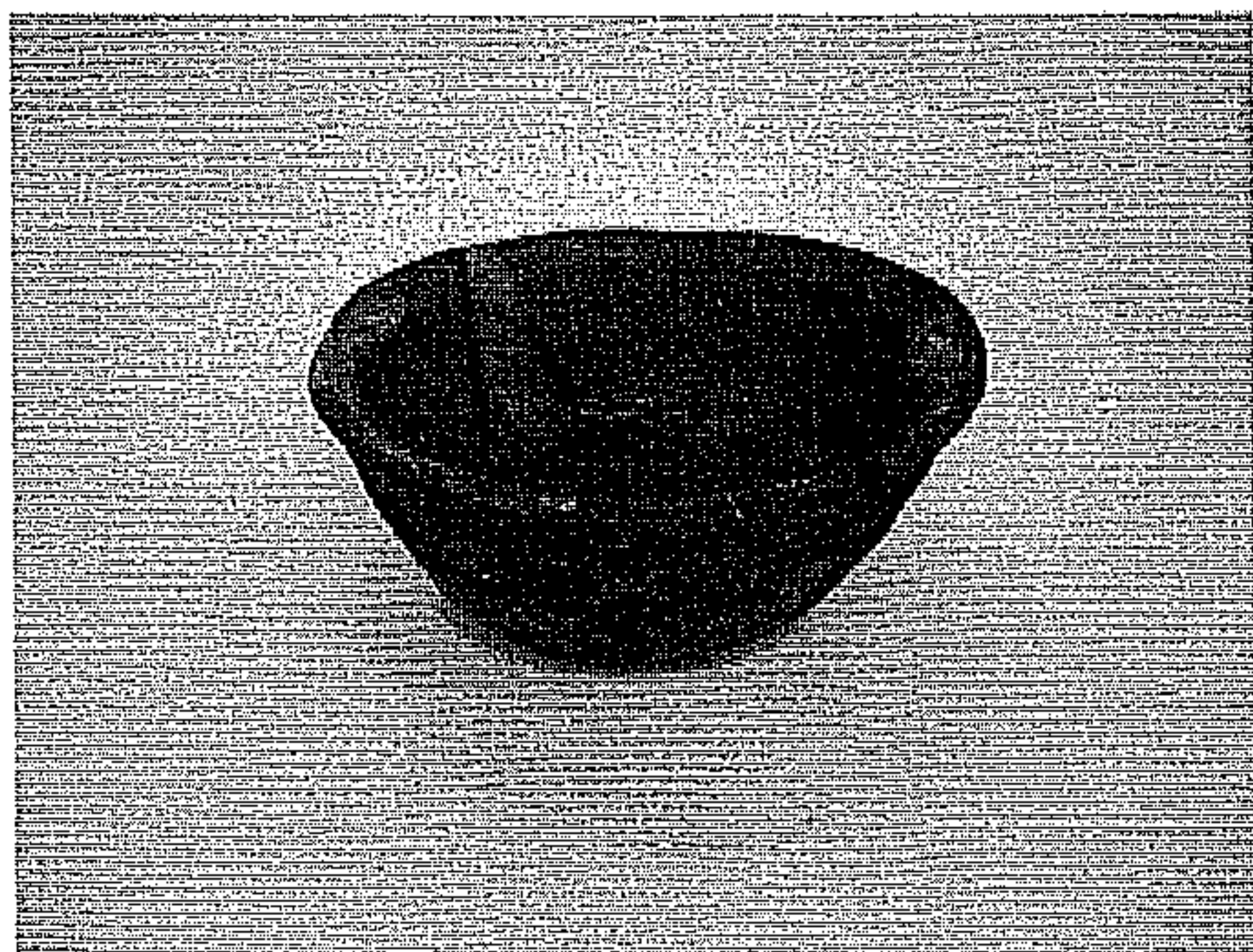
ほうろく



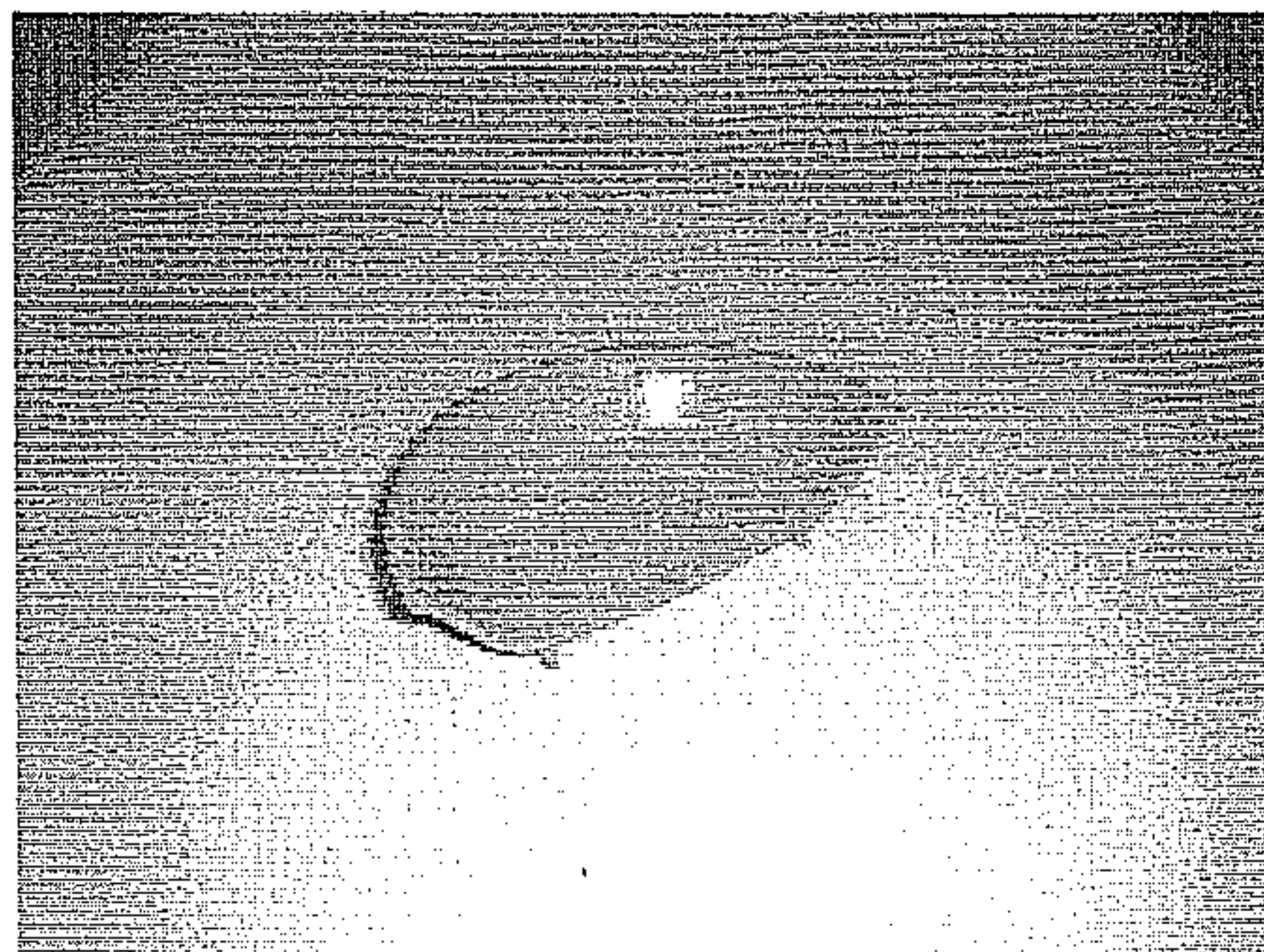
土鍋



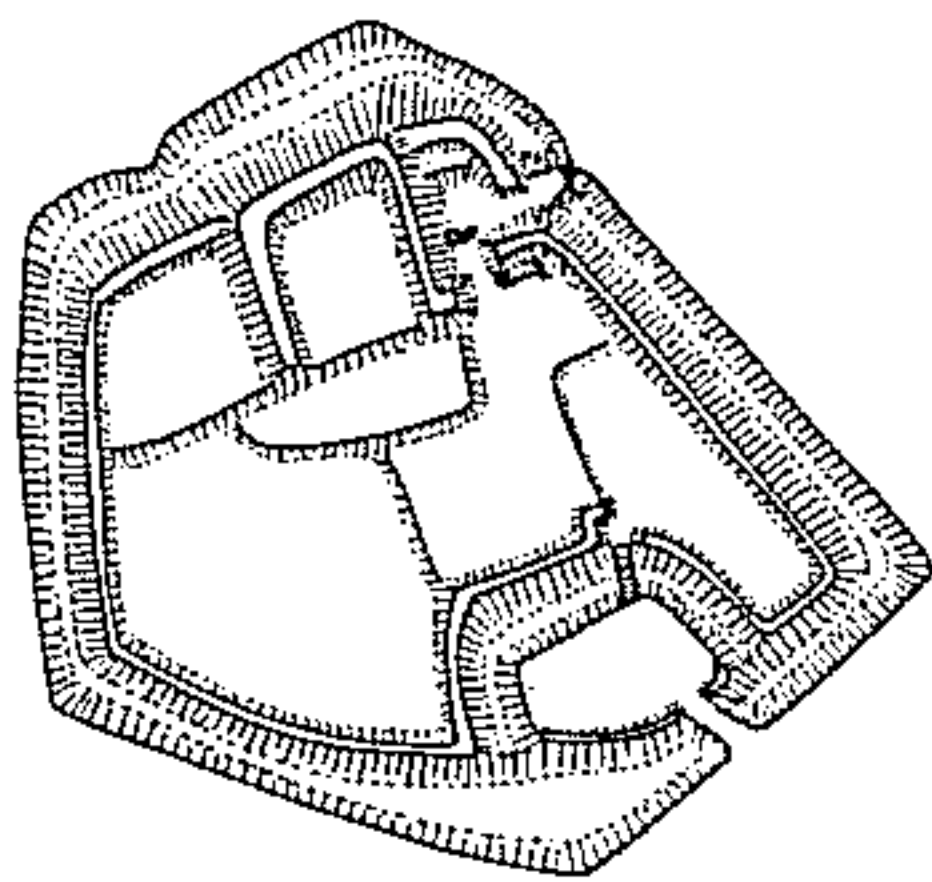
内耳鍋



内耳鍋



白磁皿



土居遺跡想像図